

日商簿記 1 級&全経上級ダウンロード講座 工原 No.21 補講【標準原価計算の期末会計処理】

収録日：平成 25 年 11 月 9 日

【出題実績】

日商簿記 1 級 111 回
全経簿記上級 170 回原価計算

	検定簿記講義	サク	スッキリ	教科書
ページ数	3	20	23	

◎説明あり、例題あり ○説明あり、例題弱い、△説明弱い、例題あり、×説明弱い、例題弱い
（「弱い」は「ない」を含みます）

弊社で確認した範囲では、日商簿記 1 級では 95 回以降出題は 111 回の 1 回だけです。
ボリュームが多いので、いきなり問われると苦しむ論点です。

この手の問題が出た時は、足切回避を最優先に考えて下さい

まずは受入価格差異を理解しよう

標準原価計算というのは、事前に標準原価を決めて、その原価で期中は会計処理を迅速に行い、さらに管理会計機能をあわせもつ優秀なシステムです。

では材料に関しては、標準原価で買ったことにして処理すれば「もっと楽じゃないか」という風に考えられたのです。

例えば以下のような原価標準データを使用している会社があるとします

原価標準データ	
直接材料費	400 円/kg × 2 kg = 800 円
加工費	500 円/時 × 3 時間 = <u>1,500 円</u>
製品 1 個あたりの標準製造原価	<u>2,300 円</u>

ここで、100Kg を 420 円で買ったとすると

材料 40,000 / 買掛金 42,000
受入価格差異 2,000

と処理します

本来であれば@420 円で原価計算するべきところを、400 円で計算する訳ですね。

20 円がズレたまま、決算を迎えます。

日商簿記 2 級の原価差異の会計処理はどうだったでしょう？

そうですね。全額を売上原価に賦課。標準原価計算でも、これが原則です。

ただし、標準の設定と実際が大幅にずれた場合に、全額を売上原価に賦課はちょっと乱暴ですね。例えば差異が 1,000,000 円、標準原価 2,000,000 で 100 個完成し、50 個売れたとします。

売上原価 1,000,000 と製品 1,000,000 で計算されたところに
差異を売上原価だけに賦課すると・・・

そうですね。売上原価は 2,000,000 円になります。

実際原価計算だったら、3,000,000 円の原価を売上原価 1,500,000 円と製品 1,500,000 円に振り分ける訳ですね。標準原価計算で計算した結果、本来の原価と 500,000 円も差がついてしまいます。

やはり、大きな差異が出た時には、在庫（棚卸資産）と売上原価に按分する方が合理的ですね。

では、例題で解説します。

当社では、標準製品Cを量産し、パーシャル・プランの標準原価計算を採用している。
以下の資料に基づき、各問に答えなさい。

【資料】

● 原価標準

直接材料費 400円/kg×2kg = 800円

加工費 500円/時×3時間 = 1,500円

製品1個あたりの標準製造原価 2,300円

(注) 加工費の標準配賦率は公式法変動予算(直接作業時間)に基づき算出されている。

● 当年度の年間生産データおよび販売データ

1. 年間生産データ

当期投入 6,600個

期末仕掛品 600個 (0.5)

当期完成品 6,000個

2. 年間販売データ

当期完成 6,000個

期末製品 1,500個

当期販売 4,500個

(注) 直接材料は工程始点ですべて投入する。上記の期末仕掛品の()内の数値は加工費の進捗度を示す。期首仕掛品、期首製品はなかった。

● 直接材料購入高と消費量

実際購入単価 実際購入量 実際消費量 期末在庫量

420円 20,000kg 14,000kg 6,000kg

当社は掛けで購入した時に標準単価で受け入れている。期首材料はなかった。

● 原価の当期実際発生額

加工費：9,733,500円

● 原価差異はすべて正常なものであり、期末において原価差異の会計処理を行う。

加工費においては加工費配賦差異のみ計算する。

● 製品Cの販売価格は6,000円/個である。

問1 当年度の損益計算書(売上総利益まで)と貸借対照表(一部のみ)を作成しなさい。

原価差異はすべて少額なものとみなし、全額を売上原価に賦課する。

問2 当年度の損益計算書(売上総利益まで)と貸借対照表(一部のみ)を作成しなさい。

原価差異はすべて多額なものとみなし、ころがし計算法により当年度の売上原価と期末棚卸資産に追加賦課する。

【解答】

問 1

損益計算書			貸借対照表	
売上		27,000,000	資産の部	
売上原価			流動資産	
1. 当期製品製造原価	13,800,000			
2. 期末製品棚卸高	3,450,000		製品	3,450,000
標準売上原価	10,350,000		材料	2,520,000
3. 原価差異	883,500	11,233,500	仕掛品	930,000
売上総利益		15,766,500		

問 2 (ころがし調整法)

損益計算書			貸借対照表	
売上		27,000,000	資産の部	
売上原価			流動資産	
1. 当期製品製造原価	13,800,000			
2. 期末製品棚卸高	3,450,000		製品	3,653,864
標準売上原価	10,350,000		材料	2,520,000
3. 原価差異	611,591	10,961,591	仕掛品	998,045
売上総利益		16,038,409		

① 6,000 27,000,000

6,000	7,500
6,000	10,370,000
(6,300)	1,500
	3,470,000

6,000	6,000
(6,300)	600
	(300)

③ $400 \times 27 = 800$
 ④ $500 \times 37 = 1,500$
 2,300

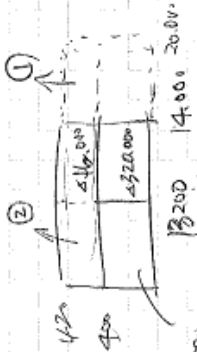
標準原価計算
 の 翌月 未会計処理

12,000	9,000
	3,000

13,200	2,000
	1,200

20,000	400
	14,000
	6,000

⑤ 400,000



18,000	13,700
	4,300

18,000	900
--------	-----

5,280,000

⑥ 400,000

70	70	9,500,000	202,500
70,000	9,000	229,091	67,500
70,000	3,000	76,364	13,500
780,000	16,000	30,545	287,500
	120,000	17,200	900
	736,000		18,900